

開催日：2023 年 9 月 3 日（日）

会場：SHIROYAMA HOTEL Kagoshima

会長：小林裕明先生（鹿児島大学医学部産科婦人科 教授）

座長：横山良仁先生（弘前大学大学院医学研究科産婦人科学講座 教授）
梶山広明先生（名古屋大学大学院医学系研究科産婦人科学 教授）

免疫チェックポイント阻害剤の抗腫瘍効果を高める漢方を用いた治療法の開発に向けて

早川 芳弘 先生 富山大学和漢医薬学総合研究所／生体防御学領域

がん免疫療法のひとつとして注目されている免疫チェックポイント阻害剤は、がん細胞が免疫細胞の攻撃をまぬがれる仕組みを妨げる薬剤である。しかし免疫チェックポイント阻害剤は高い臨床効果を示す一方で、奏効率に限界があり、その効果を増強する治療法の開発が求められているという。講演では、この課題を克服するため、漢方薬の十全大補湯の活用について検討した最新の実験研究の概要を紹介した。



十全大補湯は、がん患者において支持療法として用いられている漢方薬であり、すでに T 細胞を介した免疫調節作用を有することが知られている。また近年、免疫チェックポイント阻害剤の効果や漢方薬の薬効発揮においては腸内細菌叢が重要であることも報告されている。そこで本研究では、こうした先行研究を踏まえ、マウスがんモデルを用いて実験研究を行い、腸内細菌叢の変化や T 細胞免疫応答について解析を行った。そこからは効果発揮につながる作用機序を示唆する結果が得られているという。免疫チェックポイント阻害剤の抗腫瘍効果を増強する治療法が開発できれば、多くのがん患者にとって福音となる。研究の進展に期待したい。

がんサポーターティブケアに使える漢方薬

近藤 奈美 先生 埼玉医科大学国際医療センター 支持医療科

がんサポーターティブケアとは、治療に伴う副作用対策にとどまらず、がん患者を全人的にサポートする医療である。その中で漢方は、西洋医学の手が届かないところを補完する位置付けとなる。講演では、漢方単独で有効性を発揮するケース、副作用等で西洋医学が使えないケース、そして漢方を用いることで西洋医学の効果を増強したり副作用を軽減するケースなどに分け、それぞれに用いられる漢方薬を挙げて解説した。



がんサポーターティブケアで用いる漢方薬

漢方単独の例として、がん関連の不眠や倦怠感に補劑。食欲不振に六君子湯。こむらがえりに芍薬甘草湯。冷え性に乾姜や附子などを挙げた。また西洋医学が使えないケースでは、胃痛を生じるため NSAIDs が使えないときに附子含有の方劑。抗がん剤などの積極的な治療を行えない BSC（Best supportive care）症例に補劑を用いるなどの例を挙げ、さらに腹水がある症例では利尿剤など補劑以外にも使える漢方薬があることを紹介した。

がんサポーターティブケアにおける漢方でメインとなるのは西洋医学治療で生じる副作用の軽減で、これには、抗がん剤による食欲不振に六君子湯。口内炎・下痢に半夏瀉心湯。末梢神経障害に牛車腎気丸。持続性リンパ浮腫に柴苓湯。腹腔内手術後の腹痛や腹部膨満感に大建中湯。筋肉痛・関節痛に芍薬甘草湯といった例を挙げた。

がん治療によって生じる口内炎に用いる半夏瀉心湯

さらに講演ではがん患者に高頻度・広範囲に発症する口内炎に用いる漢方薬を取り上げ解説を加えた。基本処方半夏瀉心湯で、上腹部のつかえと下痢等の胃腸炎症状を伴う場合が目標となる。

がん治療によって生じる口内炎は、まず抗がん剤や放射線療法に誘発されて発生するフリーラジカルにより口腔粘膜が傷害され、炎症性サイトカインの放出によって炎症や痛みが起こり、さらに痛みが強まるとともに病原菌の感染や潰瘍形成が生じるという経過を辿る。これに対し半夏瀉心湯はフリーラジカル消去（抗酸化）、抗炎症、鎮痛、抗菌、組織修復を有し、このすべてのプロセスに作用することが明らかになっている。ただし、半夏瀉心湯には肝機能障害や間質性肺炎に留意する必要がある。特に抗がん剤の投与により薬剤性の間質性肺炎や肝機能障害などの副作用を引き起こすが患者が少なくなく、半夏瀉心湯の併用が躊躇される場合は、黄連湯への変更も選択肢になると補足した。

各処方の製品電子添文はこちら

- ・半夏瀉心湯
- ・六君子湯
- ・十全大補湯
- ・芍薬甘草湯
- ・大建中湯
- ・牛車腎気丸
- ・柴苓湯
- ・黄連湯